



Title	『海国図志』版問題新論：従来未知の版区別の発見とその含意
Author(s)	田野村，忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要．2023，63，p. 115-143
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91243
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『海国図志』版問題新論

——従来未知の版区別の発見とその含意——

田野村 忠 温

1 はじめに

19 世紀中葉、アヘン戦争の直後に海防思想に基づいて編まれ、世界に関する知識を中国そして日本にもたらすのに大きな役割を果たした魏源（1794～1857（乾隆 59～咸豊 7）年）の大規模な世界地理著作『海国図志』¹にどのような版があるかという問題については従来中日両国の多数の歴史研究者と若干の言語研究者による議論や記述がある。しかし、歴史的資料にも中国語にも疎い筆者の目で見ても、それは常に不十分な調査、皮相な観察、即断、他者の論の軽信に基づく弛緩した論理で語られてきたと評せざるを得ない。

『海国図志』は魏源の没後も 20 世紀初頭に至るまで繰り返し再出版されたが、この小論では魏源の生前に出版された、すなわち、出版に魏源自身が関わったと考えられる諸版——それをここでは「本来版」と呼ぶ——を考察の対象とする。『海国図志』の全出版期間は半世紀以上に及ぶが、本来版はすべてその最初の約 10 年間に出版された。

周知の通り、『海国図志』の本来版には 50 巻本、60 巻本、100 巻本の 3 種類の版がある。それらに関する現在の一般的な理解は、50 巻本は 1844（道光 24）年、60 巻本は 1847（道光 27）年、100 巻本は 1852（咸豊 2）年にそれぞれ出版された、そして、60 巻本には 1849（道光 29）年刊の重訂版があるというものであろう。すなわち、60 巻本には 2 種類の本来版があるのに対し、50 巻本と 100 巻本の本来版はいずれも 1 種類しかないと考えられている——ただし、後に触れるように、中国には 50 巻本と 100 巻本のいずれに関しても不透明な異説がある——。

しかし、これまでに何度か『海国図志』に触れる機会（拙論（2015, 2019, 2021a, 2021b 他））

¹ 増田（1972, 1979）は、『海国図志』が日本に与えた影響について、「世界地理・地誌に関する漢文著述の、わが国に及ぼした刺激、あるいは影響からいえば、『海国図志』を第一にあげねばならぬであろう。というのが、『海国図志』は単なる地理・地誌の知識を伝えるだけのものではなく、当時、精鋭強大な軍勢力——軍艦と大砲を擁して、東洋に迫ってきていた海外諸国に対する防衛上の戦略用兵の研究も、『海国図志』は同時に伝えるものであったからだ。」と述べている。

のあった筆者がこの問題に関心を抱いてこのたび小規模な調査を行ってただけでも、実のところ 50 巻本には 3 種類、100 巻本には 2 種類の本来版が存在することが確かめられた。本小論では 50 巻本の 3 版、100 巻本の 2 版の区別とそれらを含む本来版諸版の相互関係を明らかにし、『海国図志』の歴史に関する理解の正確化を図る。

2 従来の議論

『海国図志』の出版に関わる議論はその初期段階に集中している。ここでは従来 50 巻本について論じられてきたことを確かめ、それに関して筆者が問題と考えるところを述べる。100 巻本については議論と言うほどのものはないが、確認を要する記述を後の節で取り上げる。

2.1 日本における議論

佐々木 (1985) は「『海国図志』余談」と題されてはいるものの博識に基づく有用な論考であり、『海国図志』の内容その他について教えられるところが多い。

佐々木は版の問題に関しても熱弁をふるい、その後の研究者の信頼を得ている。しかし、その論には 2 つの大きな問題がある。第 1 に、佐々木は先行研究における妥当な記述については

「海国図志」編纂の経緯や出版の経過は、中国では呉沢・黄麗鏞著「魏源海国図志研究」陳耀南著「魏源研究」（註一・一一参照【註1 と註11 に書かれた各文献の書誌情報については本稿末の文献一覧を参照】）に詳述されており、また日本では百瀬弘著「海国図志小考」（「岩井博士古稀記念典籍論集」岩井博士古稀記念事業会、昭和三十八年刊、六九一—六頁）に（五十巻本が道光二十二年に刊行されたことになっている点を除き）要点は大体正確にのべられている。

という短い紹介ですませ、「だがそれにも拘らず『海国図志』についての間違った記述が依然として跡を絶たない。」として、『海国図志』が 60 巻本に始まったとする記述のいくつもの例——^{あゆざわ}鮎沢 (1953) その他——を引いて逐一その誤りをあげつらっている。佐々木のそこの目的は 60 巻本原刊説の発生を招いた「編者魏源の粗漏と杜撰さ」を論じることにあるので、そのことを見抜いて、すなわち、あれこれの研究から誤った説だけを選び出して論評を加えているものと理解して読めば問題ないが、普通に通読するだけではそれは分からない。あたかも大半の先行研究が 50 巻本の存在を把握していないかのような書きぶりである。

佐々木は現に「初刊五十巻本の存在が忘れ去られた」、「（五十巻本は）その存在すら余り知られていない」とまで書いている。しかし、実際には、『海国図志』が 50 巻本に始まった

ことを正しく述べている研究は、佐々木の言及する百瀬 (1963) よりはるかに早くから、そして、いくらでもある。百瀬 (1934) がそうであるし、百瀬以外にも例えば井辺^{いべ} (1933) と小野 (1937) は次のように述べている。

丁度この頃より魏默深【=魏源】の関心が対外関係に向ひ遂に対英海防論の立場から海国図志五十巻を著したのであつた。 (井辺 (1933))

本書【=『海国図志』】の刊本に三種がある。一は道光二十四年（一八四四）の刊行で五十巻（古微堂活字印本）。二は同二十九年の刊行で六十巻（同重訂刊本^{ママ}）三は咸豊二年（一八五二）の刊本で百巻（同重刊定本）ある。 (小野 (1937))

60 巻本の出版年は正しくは 1847（道光 27）年である——1849（道光 29）年はその重訂版の出版年である——ので小野の記述はその点が不正確であるが、それを除けば 50 巻本の出版年を含めて佐々木の説を含む現在の一般的な理解に一致している。百瀬、井辺、小野以後も、比較的早い事例で言えば松原 (1942)、羽田 (1951)、下中編 (1954)、野村 (1957)、里井 (1959)、小野川^{おのがわ} (1960)、新島 (1962)、堀川 (1966a, 1966b)、山本 (1966)、大庭編著 (1967)、原田 (1969) などが『海国図志』に 50 巻本があることを述べている。しかも、上に引用した小野 (1937) も羽田 (1951)、下中編 (1954)、里井 (1959) も歴史の入門書や一般的な歴史事典における記述である。50 巻本の存在が忘れ去られたわけでもなければあまり知られていなかったわけでもなく、事実上単に 50 巻本の存在を把握していない研究者も中にはあったというだけのことに過ぎない。佐々木の論は自身の目的のために研究史を恣意的に歪曲して提示したものになっている。²

第 2 に、異説のある 50 巻本の出版年について佐々木は

大体各版本が何時刊行されたかなどということは、各版本を調べて見れば簡単に判ることである。先ず五十巻本を見ると、扉の裏に二行に分けて「道光甲辰仲夏・古微堂聚珍板」とあり、本書が道光二十四年（一八四四年）仲夏、即ち五月に古微堂より木活字版で刊行されたことが分る。^{（ママ）}

と言うが、いかにも短絡的な判断に基づく主張である。佐々木はためらいなく断定している

² 日本での研究状況と異なり、中国の学界ではかなり遅くまで 50 巻本の存在がほとんど知られていなかったようである。佐々木も言及している呉・黄 (1963) は“『海国図志』五十巻本問題”に関する節を特に設けて 50 巻本の存在を論じている。佐々木は、日本の研究状況を呉・黄の論述に重ね合わせて理解し、それに合致する事例だけを取り上げたのかも知れない。

が、それは 50 巻本に単一の版しかないという保証があって初めて言えることである。佐々木の見た 50 巻本の扉の裏（見返し）に道光 24 年と書いてあったとしても、もしそれとは異なる版が存在するとすれば話は違ってくる。しかも、後述する通り、実はたとえ単一の版しかないとしても上の判断は必ずしも成り立たない。以後の議論のためにも当該の版の扉と見返しを図 1 に示す。

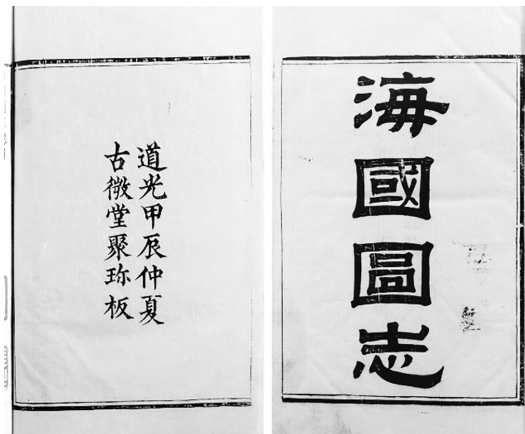


図 1 『海国図志』50 巻本の扉と見返し（関西大学図書館内藤文庫蔵）

佐々木はその後、上記の論文の発表直後に入手したと言う黄 (1985) に関する紹介記事を書いている（佐々木 (1986)）。黄は『海国図志』の版について次のように記述している。これは魏源の著作目録の一部であり、これ以上の詳しい説明はない。

《海国图志》版本甚多，已知有：（版は非常に多く、既知のものには以下のものがある。）

五十巻本

- （1）道光壬寅（二十二年，1842 年）木活字本；
- （2）道光甲辰（二十四年，1844 年）邵阳【＝湖南省の地名】魏氏古微堂活字本。

六十巻本

（後略）

これを受けて、佐々木は「道光二十四年刊本の前に二十二年刊行の木活字本があるらしいが、これは大変珍らしい。現物があるなら是非見たいものである。」と書いている。50 巻本が道光 24 年に刊行されたことが簡単に分かるという、他者の研究に対する批判として発した前言は暗黙裡に撤回したのであろうか。

日本における研究についてはここでの目的には以上のことを確かめれば十分である。特に注意を払うべき独自性のある論はほかにはない。

2.2 中国における議論

中国では、すぐ上に引用した黄 (1985) の記述が信頼性を欠く異説を生じ、それが学界の一部に定着している。

『海国図志』50 卷本に「道光壬寅（二十二年，1842 年）木活字本」なるものがあるとする黄の記述はおそらく孫 (1936) によっている。そこでは次のように記されている。

海國圖志五十卷附圖一卷 邵陽魏源撰 道光二十二年刊木活字本

この記述は現代の研究においてもなお繰り返し言及されるが——呉・黄 (1963)、黄 (1985)、陳華 (1988)、洪 (1994)、鄒 (1999, 2000)、張・田 (2021) など——、単なる図書目録の 1 項目であり、安易に信用できるものではない。実際、孫は 60 卷本については「道光己酉古微堂刊^(ママ)」と記しているが——「道光己酉」は道光 29 年——、それはすでに触れた通り 60 卷本の重訂版の出版年である。資料を確認することなく、もっぱら文献の記述に頼って過去の出版を認定することはできない。

ところが、そうした図書目録や著作目録における不確実な記載が『海国図志』を論じる者に事実として受け止められ、それに基づいて架空の話が作り上げられていく。例えば、陳華 (1988) は次のように、『海国図志』50 卷本には 1843 年 1 月に出版された“道光壬寅本”と翌年に印刷された「道光甲辰本」とがあると述べている。

经过五个月的紧张工作，于 1843 年 1 月成《海国图志》50 卷，当年出木活字本。这是现在能见到的《海国图志》的第一个版本，通称“道光壬寅本”。但这个版本的实际出版日期在 1 月 29 日之后，以称道光癸卯本或 1843 年本为宜。同版次年续印，称道光甲辰本。（5 か月の集中的な編集作業を経て、1843 年 1 月に『海国図志』50 卷本は完成し、同年に木活字本が出版された。これが現在見ることのできる『海国図志』の最初の版であり、一般に“道光壬寅本”と呼ばれる。ただし、この版の実際の出版日は 1 月 29 日より後であるので、道光癸卯本ないし 1843 年本と呼ぶのが適切である。同版は翌年にも印刷された。そちらは“道光甲辰本”と呼ばれる。）

しかし、この論述はまったく疑わしい。50 卷本が道光壬寅年と道光甲辰年にそれぞれ印刷されたという主張を証明するための何らの努力もなされていないのみならず、“道光壬寅本”と“道光甲辰本”がどこにあるかということすら記されていない。両者が内容上どのよ

うな関係にあるのか、すなわち、完全に同一の版なのか多少とも何らかの差異があるのかということも不明である。³

陳は、最初から黄 (1985) における魏源の著作目録の記述が正しいと思い込み、それを検証するという発想を持たなかったのであろう。50 卷本の序文の末尾には、図 2 に見るように、「道光二十有二載歲在壬寅嘉平月」、すなわち、道光 22 年 12 月——西暦 1843 年 1 月に当たる——という年月が記されている。孫はおそらく扉を欠く 50 卷本を見て、その年月を出版時期と解釈したのであろう。そして、扉を持つ 50 卷本ではその見返しに「道光甲辰仲夏」、すなわち、道光 24 年 5 月——西暦 1844 年 6～7 月——と記されている (図 1) ことをもって黄 (1985) はその年にも出版されたと考えたのであろう。しかし、見返しに「道光壬寅」あるいは「道光二十二年」と記された 50 卷本の存在は知られていない。

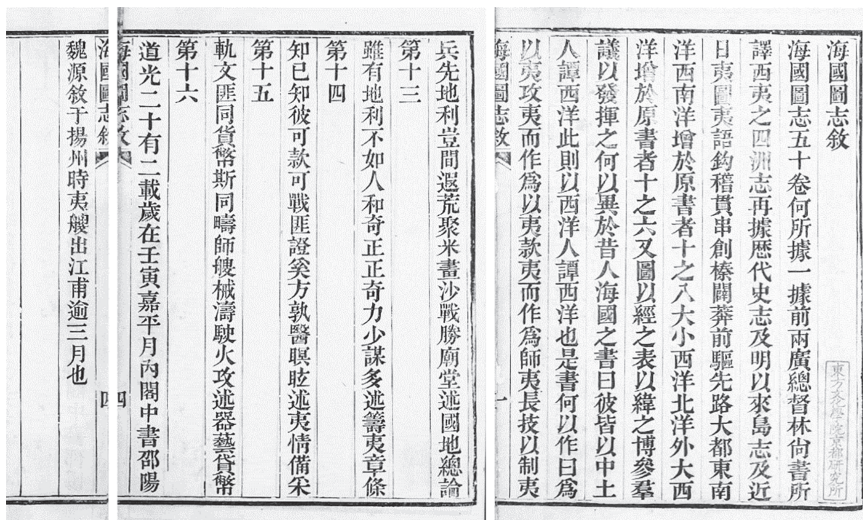


図 2 『海国図志』 50 卷本の序文の一部 (京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター蔵)

孫 (1936) と黄 (1985) の記述に端を発し、おそらく陳華 (1988) によって初めて論述化された、“50 卷本に道光壬寅本と道光甲辰本がある” という考えは中国では少なからぬ研究者に信じられ——王 (1990, 2003)、洪 (1994)、盧 (1994)、陳其泰・劉蘭肖 (2005)、夏欽欽 (2006)、夏氷 (2014, 2016) など——、1 つの通説と化している。しかし、その 2 種類の 50 卷本が存在することを

³ 陳の“実際の出版日は 1 月 29 日より後である”という説明も不可解である。もし 50 卷本の序文に書かれた道光 22 年 12 月が出版の時期を表すと考えるとすれば、同月の 1 日は西暦の 1843 年 1 月 1 日に当たるので、出版日は同日以後であることになる。また、“1843 年だから「道光癸卯本」と呼ぶのがよい”、すなわち、西暦との対応を理由に道光壬寅年を癸卯年と呼ぶほうがよいというのも奇妙な話である。

受け売りや想像の次元を超えた形で述べた研究は1つとしてない。

夏剣欽(2006)は次のように陳の記述を事実上そのまま書き写しており、そのこと自体がすでに論の信頼性を失わしめているが、注目すべきことに陳やその他の論者とは異なり“道光壬寅本”の所在を具体的に述べている。

经过五个月的紧张工作，他于十二月完成《海国图志》五十卷并撰叙，随即排出木活字本。这就是现在能见到的《海国图志》的第一个版本，通称“道光壬寅本”^②。

②此本湖南图书馆藏，装为40册，第一册一卷为《筹海篇》一、二、三、四，第二册卷二为图，包括圆图二、横图四、汉魏唐西城图三、元代疆域图一、海国沿革图五。华东师范大学图书馆藏本则装为19册，然目录与各卷次第均同，且均在卷末标注：“毘陵薛子瑜、杨承业撰字。”

（5か月の集中的な編集作業を経て、魏源は道光22年12月に『海国図志』50巻本を完成して序文を書き、直ちに木活字本を出版した。これが現在見ることのできる『海国図志』の最初の版であり、一般に“道光壬寅本”と呼ばれる。これは湖南図書館にあり、40冊に装丁されている。華東師範大学図書館蔵本は19冊に装丁されているが、目次も各巻の順序次第も湖南図書館蔵本と同じであり、いずれも各巻末に“毘陵（江蘇省常州の古名）の薛子瑜と楊承業が植字した”と記されている。）

夏はこのように“道光壬寅本”が湖南図書館と華東師範大学図書館にあると言う。しかし、筆者が両図書館の蔵本を確かめてみたところ、いずれにも扉はなく、ただ序文に「道光二十有二載歲在壬寅嘉平月」——道光22年12月、1843年1月——と記されているだけであった。湖南図書館には上の引用にある40冊本のほかに16冊の形に装丁された50巻本もあるが、それには扉も序文もない。⁴

以上のことから、陳華や夏剣欽を始めとする複数の中国の研究者の言う“道光壬寅本”は、現在知られている限りにおいて、“道光甲辰本”と異なるものとして存在しないという結論になる。

しかしながら、華東師範大学図書館蔵の50巻本からは予期しないことが判明し、筆者が『海国図志』の版に関する調査を拡大するきっかけになった。夏(2006)はその論述自体は誤っているが、筆者にとって貴重な情報源になったことになる。

⁴ 夏剣欽・熊(2009)は、高(1997)が“50巻本は1842（道光22）年に原稿が完成し、1844（道光24）年に初めて出版されて、社会でもてはやされた”と書いているのに反駁し、“50巻本は1842年の原稿完成後直ちに出版され、それがもてはやされたからこそ1844（道光24）年にも重刷されたのだ”と述べて“道光壬寅本”の存在をあらためて主張しているが、根拠は示されていない。

また、夏永(2016)は50巻本の“道光甲辰本”と60巻本の新訂版について、「这两部都是未作多大修改的重印本」（いずれも大規模な改変を伴わない重印本である）と言う。しかし、50巻本と60巻本を同列に論じることはいかなる理由もできない。原刊版と異なる新訂版が現在存在する60巻本と異なり、50巻本についてはそもそも“道光壬寅本”と“道光甲辰本”という2版の存在が確認されていない。

3 『海国図志』 50 巻本

『海国図志』 50 巻本は知られる限りにおいてすべて本来版である。すなわち、魏源の没後に出版された 50 巻本の存在は知られていない。⁵

3.1 50 巻本の 3 つの版

従来、『海国図志』 50 巻本には単一の版しかないと考えられてきたが——ただし、上述の通り、中国には根拠を欠く異説がある——、実は少なくとも 3 種類の版がある。

論述の見通しをよくするためにまず結論から述べれば、筆者の確認することのできた 10 点の 50 巻本のうち、最も早く刊行されたと見られるのが 2 点の上海図書館蔵本である。この版を「原刊版」と呼ぶ。そして、それが 2 度にわたって修訂されており、それらの新しい版を「修訂版1」「修訂版2」と呼ぶ。

どこにある 50 巻本がそれぞれの版に該当するかを表 1 に示す。上海図書館蔵の 2 点を区別するために「甲本」「乙本」と名付ける。

表 1 『海国図志』 50 巻本の 3 版⁶

	確認した本
50 巻本原刊版	上海図書館蔵甲本 (20冊、請求番号 線普長3604)
	上海図書館蔵乙本 (20冊、請求番号 線普長421301-20)
50 巻本修訂版1	愛知大学図書館蔵本
	関西大学図書館蔵本
	京都大学人文科学研究所蔵本
	湖南図書館蔵本 (40冊、請求番号 善291.7/11)
	湖南図書館蔵本 (16冊、請求番号 善291.7/11(1))
	島根県立図書館蔵本
50 巻本修訂版2	和泉市久保惣記念美術館蔵本
	華東師範大学図書館蔵本

上海図書館蔵の原刊版は甲本、乙本ともに扉と序文が付いているが、修訂版1の 6 点には扉と序文の有無に関して 4 種類のものがある。ここに言う「扉」は、その表と裏にそれぞれ

⁵ 洪 (1994) の稿末に掲げられた『海国図志』現存版の一覧には 1876 (光緒 2) 年刊の 50 巻本と 1902 (光緒 28) 年刊の 60 巻本が挙げられている。しかし、いずれについても所在は記されておらず、また、それらの版に言及したほかの研究も筆者は確認できていない。おそらくいずれも洪ないし洪が拠った情報源の混乱に基づく記述であろう。

⁶ 上海図書館蔵本の請求番号に付された「線普」は「普通古籍」、「長」は上海図書館の母体の 1 つである上海市歴史文献図書館の旧所在地名長樂路を表す。表中に「京都大学人文科学研究所蔵本」と記したのは正確には「京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター蔵本」である。

「海国図志」、「道光甲辰仲夏古微堂聚珍板」と書かれた第1冊冒頭の1葉（図1）を指す。「序文」は4葉から成る「海国図志叙」である。具体的な状況を表2に示す。

表2 50巻本修訂版1の諸本の形態

	扉	序文	該当例
A	有	有	愛知大学図書館蔵本
			京都大学人文科学研究所蔵本
			島根県立図書館蔵本
B	有	無	関西大学図書館蔵本
C	無	有	湖南図書館蔵本(40冊)
D	無	無	湖南図書館蔵本(16冊)

このように、扉と序文をともに持つもの（A）、一方のみを持つもの（BとC）、どちらも持たないもの（D）がある。しかし、筆者の部分的な確認の限りにおいては、いずれも文面にも字形にも違いがない。加えて、框郭のかすれや消失の様子についても共通する要素が多い。したがって、扉や序文がなくてもすべて同一の版であると判断することができる。

修訂版2の2点はともに扉の1葉を欠き、表2における分類で言えばCの類に該当する。これについても、文面や字形の比較に基づいて両者を同一の版と判断することができる。

以下に諸本の観察と分析に基づいて50巻本の3版の相互関係について述べる。ただし、10点の50巻本の大半はその内容のごく一部しか確認できておらず、そのような制約のもとでの考察である。上海図書館蔵の原刊版は実は甲本と乙本とで扉の1葉の字形が異なっているのであるが、それ以外の差異を確認できていないので、ここでは単一の版として扱う。

3.2 50巻本3版の関係(1)——原刊版と修訂版1

50巻本は、扉、序文、巻二における地図とその解説などを除き、活字を使って印刷されている。⁷

まず原刊版と修訂版1の関係について言えば、扉の1葉の版（木版）および10葉から成る目次（「海国図志総目」）の版（活版）が全面的に作り直されている。序文については判断に迷う要素もあるが、おそらく原刊版の版（木版）がそのまま使われている。

本文の版（活版）は巻、葉によって状況が異なり、修訂版1の版が原刊版の通りであるところと新たに作り直されているところとがある。ただし、版が改められている巻、葉の範囲は未詳である。それを正確に把握するには全葉にわたる確認が必要である。

⁷ 活字印刷との関連で付言すれば、50巻本では多くの巻の末尾に「毘陵薛子瑜、楊承業撰字」という植字者名の表示があるが——そのことは先に引用した夏剣欽(2006)の記述にもあった——、目次の末尾にもその表示があるのは原刊版だけである。

3.2.1 字形の差異

扉と見返しは一見したところではまったく同じもののように見えるが、注意して見比べれば文字の形が全体に異なっていることが分かる。例えば、各版における扉の「海国図志」の「国」の字を図3に示す。



図3 50巻本の扉の「国」——原刊版（左）と修訂版1（右）⁸

細かく見るといくつかの違いがあるが、左上角の輪郭の曲率が異なる、内側にある「口」の下辺の下端が原刊版では曲線的であるのに対して修訂版1ではほぼ直線的であるなどの違いが分かりやすい。

字形の差を容易に確認することができるのは、両版において相異なる異体字が使われている事例である。目次に見られる異体字の差の例を表3に示す。

表3 原刊版と修訂版1における異体字の差

	海国図志総目								
	標題	卷七	卷八	卷十四	卷十五	卷十八	卷三十	卷三十一	卷四十一
原刊版	海	目	島	島	教	教	臥	卽	呂
修訂版1	海	目	島	島	教	教	卧	卽	呂

異体字の組合せに原刊版と修訂版1とで逆の関係になっているものがいくつもあることから、各版において特定の異体字を好んで使っているわけではなく、単に異体字の差には関わらずに活字を使っているということであるらしいことが分かる。

3.2.2 表現の正誤

原刊版と修訂版1の違いは字形の差にはとどまらない。正しい表現と誤った表現の関係にある事例として筆者の気付いたものが3例ある。

3例のうち2例は目次におけるもので、「卷十六 西南洋諸国」の箇所にトルコの国名が原刊版では誤った字順で「西南洋南魯都機国」と書かれているのが、修訂版1では正しく「都魯機」と書かれている。また、「卷四十二 外大西洋墨利加洲」の箇所にブラジルの国名が脱字を生じ

⁸ 原刊版の「国」は上海図書館蔵甲本、修訂版1の「国」は関西大学図書館蔵本による。

て「南墨利加洲内西爾[・]国」と書かれているのが、修訂版1では正しく「伯西爾」と書かれている。

わずかの葉しか確認できていない本文で気付いた事例は1例だけであるが、卷二十七「大西洋 欧羅巴洲 仏蘭西国沿革」の第16葉表にある「火丹輪[・]」が修訂版1では「火輪舟」となっている。文脈上これは船種の名称であり、後者が蒸気船を表す正しい表現で、前者はその誤植だと考えられる。以後、葉数とその表裏は「16a」「32b」のような形で示す。

3.2.3 両版の先後関係

しかし、以上の事実を確認しただけでは2版の新旧は分からない。複数の異体字はどれを使っても問題がなく、あらゆる再版の機会にいかなる方向にも変化する可能性があり、また、表現の正誤の例にしても、旧版の誤記が新版で訂正されたと考え得ると同時に、旧版では正しく書かれていた表現に改版時に誤りが生じたという可能性も考えられるからである。

この問題を考えるうえで着目すべきは、両版の後に出版されたと考えられる修訂版2との関係である——修訂版2が修訂版1より新しい版であることは次の3.3で述べる——。修訂版2を確かめてみると、「都魯機」と「伯西爾」も「火輪舟」もすべてそのように正しく書かれていることが分かる。したがって、目下比較している2版はやはりここで考えている新旧の関係にあり、原刊版の誤記が修訂版1で訂正された——そして、それが修訂版2にも引き継がれた——と判断することができる。

それにしても分からないのは、なぜ一部の葉の版をわざわざ作り直したのかということである。作り直された葉の大半はそもそも原刊版に誤りがなく、また、誤りがある葉も本来当該の活字だけの差し替えによって訂正することができたはずである。ことによっては、一般的な理解に反して50巻本は実は多数刷られ、摩耗あるいは破損などの理由で版を作り直す必要があったのか。未解決の疑問として残さざるを得ない。

3.3 50巻本3版の関係(2)——修訂版1と修訂版2

夏剣欽(2006)の記述にある華東師範大学図書館蔵の50巻本および和泉市久保惣記念美術館蔵の50巻本はともに原刊版とも修訂版1とも異なる修訂版2である。

修訂版1から修訂版2への改版は本文に関して行われており、版（活版）が作り直されている。序文と目次については筆者の確認の限りでは版がそのまま引き継がれている。扉の1葉のある修訂版2は確認できていないので、扉が作り直されたかどうかは不明である。

ただし、修訂版1における改版と同じく、全巻、全葉の版が作り直されているわけではない。

例えば、巻一⁹「籌海篇一 議守上」の開始部分は修訂版1と修訂版2で版が共通である。したがって、冒頭の序文からそこまでの範囲を確かめるだけでは、両者が相異なる版であることが分からないことになる。

版が作り直された本文の範囲が未詳であることも、ほとんど問題のない葉の作り直しが行われた目的が分からないことも修訂版1に関して述べたところと共通である。

3.3.1 字形の差異

原刊版と修訂版1の関係と同じく、修訂版1と修訂版2にも多くの字形の差が認められる。例えば、巻六「東南洋四 海岸之国」の13bと14aの見開き1面の範囲だけでも表4に示すような異体字の差がある——「鬪」の字形は実際にはここに示したものとは若干異なる——。

表4 修訂版1と修訂版2における異体字の差

	巻六								
	13b							14a	
修訂版1	民	滅	鬪	酋	毎	紀	容	蘭	教
修訂版2	民	滅	鬪	酋	毎	紀	容	蘭	教

原刊版と修訂版1の比較に関しても述べた通り、異体字の観察に基づいて修訂版1と修訂版2の新旧を知ることはできない。実際、表4に見るように、例えば「民」のように修訂版2のほうが現代の字形に一致する字もあれば、「滅」のように修訂版1のほうが現代の字形に一致する字もあり、そのことも異体字の差が版の新旧を知る手がかりにならないことを示している。

3.3.2 表現の正誤

版の新旧の判定に役立つ可能性があるのはここでも、一方の版の表現が正しく、他方の版の表現が誤っているという関係にある事例である。

修訂版1と修訂版2を比較してみると、表現の正誤の关系到2通りの場合があることが分かる。すなわち、修訂版1の表現が正しい場合と、修訂版2の表現が正しい場合とである。

修訂版1の表現が正しく、修訂版2の表現が誤っている事例として確認できたのは次の1例である。『海国図志』50巻本では句読点がまったく使われていないが、読みやすさのためにそれを適宜補って引用する。

⁹ 実際には「巻之一」と書かれているが、巻によって、また、本文か版心かによっても「之」の有無が一定しないので、ここでは一律に「之」を省いて記す。

修訂版1：

土産鉛、錫、翠毛、佳紋蓆、燕窩、海參、藤、胡椒等貨。（当地は鉛、錫、カワセミの羽毛、佳紋蓆、燕の巢、ナマコ、藤、胡椒などを産する。）

修訂版2：

土産鉛、錫、翠、佳紋蓆、燕窩、海參、藤、胡椒等貨。

（^{（シンガポール）}卷六「東南洋四 海岸之国 新嘉坡沿革三」、13b）

修訂版1では正しく「佳紋蓆」と書かれているが、修訂版2では誤って「佳紋席」と書かれている。「佳紋席（蓆）」は中国の古い文献に南洋の産物の名称として現れる。広東語辞典である白編 (1998) はそれを「紋路細密の一種蓆」（編み目の細かい一種の敷物）と説明している。日本の川瀬白巖『万国通商往来』（1873（明治6）年）では「^{（ママ）}えむしろ」という振り仮名が添えられている。それらのことを考え合わせるに、模様が編み込まれたマットやカーペットの類であろう。

逆に、修訂版1の表現が誤っており、修訂版2の表現が正しい事例として確認できたものは3例ある。その第1の例はマラッカに関する次の記述である。

修訂版1：

永楽三年、詔暹羅^{（シャム）}国王勿開兵隙、暹羅王遣使謝罪。然陽遵謝違、竟侵服之。

修訂版2：

永楽三年、詔暹羅国王勿開兵隙、暹羅王遣使謝罪。然陽遵陰違、竟侵服之。（永楽3年に明皇帝は詔を発してシャム国王に（マラッカに対する）武力攻撃を禁じ、国王は使節を派遣して謝罪した。しかし、表向きは従いつつ裏では背き、（マラッカを）侵略征服した。）

（卷六「東南洋四 海岸之国 新嘉坡沿革三」、14a）

修訂版2では正しく「陽遵陰違」（表は従い裏では背く）と書かれているが、修訂版1では誤って「陽遵謝違」と書かれている。ちなみに、このくだりは入華ドイツ人宣教師カール・フリードリヒ・アウグスト・ギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff、中国名郭実臘、郭士立）らの出版した月刊誌『東西洋考毎月統記伝』からの引用の一部であり、原文は次の通りである。句読点を現代式に調整して引用する。

永楽三年間、奏陛下為降詔暹羅国王勿開兵隙、暹羅王遣使来謝侵伐之罪。雖然言遵命、行違諭、侵伐国服之。

（^{（ジャワ）}「呀瓦大洲 附麻刺甲」^{（マラッカ）}、『東西洋考毎月統記伝』癸巳十二月、1834年（道光13年12月））

ここでは当該の箇所は「雖然言遵命、行違論」（口先では命令に従うが、行動はそれに背く）と書かれており、それが『海国図志』への引用に際して「陽遵陰違」という簡潔な文体の表現に改められたということが分かる。

第2の例はオーストリアに関わる次の記述である。

修訂版1：

又蚕食耶馬尼、波蘭、意大国各国辺境、増建部落、遂為欧羅巴洲最大之国。

修訂版2：

又蚕食耶馬尼、^(ドイツ)波蘭、^(ポーランド)意大里^(イタリア)各国辺境、増建部落、遂為欧羅巴洲最大之国。((オーストリアは)さらにドイツ、ポーランド、イタリア各国の国境部を蚕食して集落を建設し、ヨーロッパで最大の国になった。)^(オーストリア) (卷三十「大西洋 欧羅巴洲 欧塞特里国」、1a～1b)

修訂版2ではイタリアの国名が「意大里」と書かれているが、修訂版1では誤って「意大国」と書かれている。¹⁰

第3の例は英国に関わる次の記述である。

修訂版1：

民日三餐。早飲茶、加菲等既麵包、餅餌、牛乳油。午後大餐、牛、羊、雞、豚、魚、菜。

修訂版2：

民日三餐。早飲茶、加菲等暨麵包、餅餌、牛乳油。午後大餐、牛、羊、雞、豚、魚、菜。(人々は1日3食である。朝は茶、コーヒーおよびパン、ケーキ、バターを食し、午後がメインの食事で、牛、羊、鶏、豚、魚や野菜を食する。)¹¹

(卷三十四「大西洋 欧羅巴洲 英吉利国広述上」、2a)

¹⁰ 50 卷本原刊版における「陽遵謝違」と「意大国」の誤字について付言すれば、いずれも直近の文脈に「謝」と「国」の字が現れる。そのことが何らかの理由によって誤字発生誘因になった可能性がある。

¹¹ “1日3食”と説明しておきながら2度の食事にはしか触れていないのは『海国図志』における記述の通りである。当のくだりは現存しない『英国論略』——「新嘉坡人之所撰」(シンガポール人の著述)と説明されている——からの引用の一部であり、原文を確認することができない。

シンガポールでキリスト教の布教と出版に従事したギュツラフの著作『大英国統志』(1834(道光14)年)の巻五に次のような類似の記述があり、ここでは英国の1日の食事は「早餐」「大餐」「晚餐」の3食と説明されている。ここでも句読点を現代風に調整して引用する。

其民用^(マカ)麦燕。麦磨粉、貼焼餅、叫做麵頭。亦有荷蘭薯兼各項蔬菜菓子。惟英吉利人悦牛肉、鵝、鴨、綿羊等肉也、及以肉為貴。早餐食茶、調牛乳、白糖、兼麵頭、傳牛油矣。大餐食肉、菜、晚餐再食菜、咖啡与米、水、各項肉也。此是三餐也。

『英国論略』の記述は『大英国統志』のそれを何らかの形で引き継いだものである可能性がある。

修訂版2では「茶、加非等」と「麵包、餅餌、牛乳油」が正しく「暨」（および）によってつながれているが、修訂版1ではそれが「既」と書かれている。

以上の両面的な事実をどのように解釈すればよいのであろうか。節を改めてその問題を考える。

3.3.3 両版の先後関係

これも原刊版と修訂版1の比較において述べたように、正字と誤字の対応の事実だけに基づいて版の新旧を判断することはできない。実際、上で見た通り、修訂版1と修訂版2とで正誤の関係が事例によって逆になっている。修訂版1が正字を使っているのが1例、修訂版2が正字を使っているのが3例であったが、調査した範囲が局限されているので、その数は信頼し得る判断材料にはならない。

ここでも着目すべきは、両版の後に出版されたはずの60巻本との関係である。上で見た4件の事例が60巻本でどのように表記されているかを確かめてみると、すべて修訂版2の表記に一致していることが分かる。すなわち、60巻本においては、「佳紋蓆」は誤って「佳紋蓆」と書かれ、「陽遵陰違」「意大里」「暨」はいずれもそのように正しく書かれている。このことから、やはり修訂版1が現に先に出版された版であり、修訂版2はそれに変更を加えた版である——そして、その内容が60巻本に継承された——と判断することができる。ただし、「佳紋蓆」に関しては字形の類似に起因する誤りが生じて「佳紋蓆」になり、修訂とは逆の方向の変化となった。¹²

3.4 50巻本3版の出版年

50巻本原刊版では扉の見返しの刊記に「道光甲辰仲夏」、道光24年5月という年月が書かれている。それが出版の時期を正確に表しているという保証はないが、それを疑うべき理由もないので、原刊版は同月、すなわち、1844年6～7月に出版されたと考えるのが穏当であろう。

修訂版1の見返しにもまったく同様に書かれている。しかし、同一月に2つの版が出版されたとは考えがたい。修訂版1はおそらく原刊版出版の後それなりの時間を経て見返しの表示を変えることなく出版されたのであろう。とすれば、それは“見返しに「道光甲辰仲夏」と書いてあるから1844（道光24）年に出版されたことが簡単に分かる”とする、佐々木を含むあらゆる研究者の素朴な判断が実は成り立たないことを意味する。¹³『海国図志』の見

¹² 「佳紋蓆」は60巻本の重訂版において訂正され、本来の「佳紋蓆」に戻った。「佳紋蓆」「陽遵陰違」「意大里」「暨」はすべて100巻本に継承されている。

¹³ 序文における紛らわしい記述を通じて『海国図志』60巻原刊説の発生を招いた「編者魏源の粗漏と

返しにおける刊記の信頼性が現に低いことについては、それを明確に示す事例が2つある100巻本のところで述べる。

修訂版2については見返しを持つ本を確認できていない。

いずれにせよ2つの修訂版の出版時期はほぼ確実に1844（道光24）年から60巻本の出版された1847（道光27）年にかけての期間内であったはずである。もし期間の両端の年を除外してよいとすれば、1845（道光25）年か1846（道光26）年のいずれかであったことになる。そして、さらに50巻本の3版と60巻本原刊版の出版の時間的間隔が均等であったと仮定すれば、修訂版1は1845年、修訂版2は1846年に出版されたことになる。

従来研究に使われてきた50巻本はその多くが修訂版1であった。したがって、もし上の推定が正しければ、その出版年は従来言われてきた1844年ではなく1845年ごろであることになる。¹⁴

なお、佐々木は50巻本の発行部数が少なかったかのように言うが、2種類もの修訂版が出版されたくらいであるから¹⁵、単に歴史の中で失われただけのことで、実はそれなりの部数が発行されたのかも知れない。60巻本も50巻本と同様に現存は少ないし、100巻本も長期にわたって繰り返し再出版され、相当の部数が流通したはずであるが、そのことを実感させるほどの残存があるわけではない。

4 『海国図志』100巻本

『海国図志』100巻本には本来版のほかに魏源の没後に出版された多くの版——以後それを「重刊版」と総称する——がある。ここで考察の対象とするのは本来版である。

4.1 100巻本の2つの版

100巻本は50巻本に比べれば多く残存するが、版の区別に関する議論は従来やはりない。あらゆる研究者が先行研究の記述を信用し、複数の版があるという可能性を確かめようと思わなかったものと考えられる。

しかし、実際には本来版の100巻本にも少くとも2種類の版がある。両者は本文の字形と

杜撰さ」に対して佐々木自身も警戒が足りず、見返しの紛らわしい記述を信用して不用意な判断に陥ったと言うことができる。

¹⁴ 夏劍欽(2006)は湖南図書館蔵本と華東師範大学図書館蔵本を“道光甲辰本”に先立って出版された“道光壬寅本”、すなわち、50巻本の最初の版としているが、それぞれ修訂版1、修訂版2であることが確認された以上、いずれもその出版は当然“道光甲辰本”である原刊版より遅いことになる。

¹⁵ 正確を期して言えば、修訂版2は扉や見返しを確認できていないので、それが出版されたかと断言してよいかどうかは不明である。しかし、いずれにせよ版が2度作り直されたことは確実である。

その印象が全体に大きく異なるので、ただ見比べるだけで相異なる版であることが分かる。

ただし、扉の表と裏に酷似した篆書体で書かれた内容はいずれの版においても「海国図志 卷百卷」、「咸豊壬子年古微堂重刊¹⁶定本」で共通している——「咸豊壬子年」は咸豊2年、西暦1852（～1853）年——。1つの版における扉の様子を図4に示す。

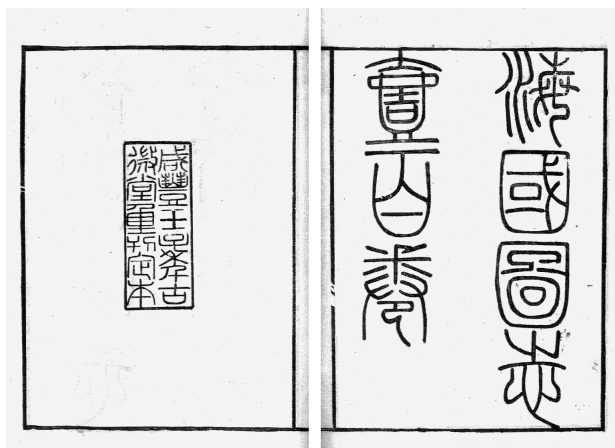


図4 『海国図志』100巻本の扉と見返し（中央大学図書館蔵）¹⁷

したがって、2版の新旧はやはり直ちには分からないわけであるが、50巻本の3版の関係に比べれば容易にそれを知ることができる。筆者の確かめることのできた8点の100巻本に関して言えば、以下で述べる理由により、関西大学図書館、神戸大学附属図書館社会科学系図書館、中央大学図書館の各蔵本が原刊版で、ほかは修訂版であると考えられる。¹⁸ 具体的には表5の通りである。

¹⁶ この「重刊」は無論本稿に言う「重刊版」のそれとは意味が異なり、60巻本を増補して出版し直したものであることを表している。

¹⁷ 扉には大判の蔵書印が押されておりモノクロ印刷では書名の一部が読めなくなってしまうので、図4には蔵書印を消去した画像を掲げた。

¹⁸ 関西大学図書館蔵本は5冊に革装され、製本の背表紙には“海國圖志／HAÏ KOÛE THOU TCHI／GÉOGRAPHIE HISTORIQUE DES PAYS ÉTRANGERS”という書名などが金箔押しされている。製本表紙の見返しには Guillaume Pauthier の論文 ‘Géographie historique et descriptive, avec cartes des états maritimes, par Wei-Youen’ (*Annales de philosophie chrétienne*, Numéro 20, 1869 年) の抜刷りが貼り付けられており、同人の蔵書であったものと推定される。

製本背表紙でも論文でも出版年が“1853”とされているが、『海国図志』本体に1853（咸豊3）年を示す記述はない。「海国図志原叙」の末尾に書かれた「海國圖志」の「豊」の字が大きく「二」の字が小さいために「豊」の最終画と「二」が「三」の字を構成しているように見えるので、それが誤読を招いたのかも知れない。

表5 『海国図志』100巻本の2版

	確認した本
100巻本原刊版	関西大学図書館蔵本
	神戸大学附属図書館社会科学系図書館蔵本
	中央大学図書館蔵本
100巻本修訂版	京都大学文学研究科図書館(地理)蔵本
	京都大学文学研究科図書館(東洋史)蔵本
	国際基督教大学図書館蔵本
	国立国会図書館蔵本
	東京大学東洋文化研究所図書室蔵本

扉は表も裏も両版で一見同じものに見えるが、よく見ると字形に若干の差がある。各版の扉における「海国図志」の「図」の様子を図5に示す。

図5 100巻本の扉の「図」——原刊版(左)と修訂版(右)¹⁹

4.2 100巻本2版の関係

以下において、字詰め、序文、字句に関わる相違に基づいて100巻本の2版の相互関係を考える。100巻本の印刷には活字は使われていない。

4.2.1 字詰めの不統一の発生と解消

まず、『海国図志』は50巻本原刊版以来一貫して21字×9行の字詰めで書かれていたが、100巻本原刊版においては「海国図志原叙」——60巻本までの「海国図志叙」をほぼそのまま継承したもの——の後に置かれた「海国図志後叙」には22字×10行、それに続く目次には20字×9行の字詰めが使われ、全体として字詰めの統一が失われた状態になっている。しかし、100巻本修訂版では「後叙」も目次も21字×9行になり、字詰めの統一が回復している。

理屈のうえでは字詰めが統一された版が原刊版で、修訂版で不統一が生じたという可能性もあり得るが、60巻本から100巻本への増補という大がかりな編集作業——そこで「後叙」が新たに加えられ、目次も全面的に書き換えられた——の中で混乱が生じたと解釈するのが

¹⁹ 原刊版の「図」は中央大学図書館蔵本、修訂版の「図」は京都大学文学研究科図書館(地理)蔵本による。

自然である。原刊版を部分的に修訂する際に字詰めの不統一が生じるということは相対的に考えにくい。加えて、魏源没後に出版された重刊版に統一的な字詰めが継承されているという事実もある。

4.2.2 序文末の刊記の変遷

次に、「海国図志原叙」の末尾における刊記の変遷を50巻本の「海国図志叙」から通して比較することによっても100巻本の原刊版と修訂版の関係を考えることができる。すなわち、50巻本の「叙」では「道光二十有二載歲在壬寅嘉平月内閣中書邵陽魏源叙于揚州時夷艘出江甫逾三月也」（道光22年12月、内閣中書邵陽魏源、揚州にて叙す。英国軍艦が長江を出でてより3月を過ぐ。）²⁰と書かれ、60巻本ではそれに「原刻僅五十卷今増補為六十卷道光二十七載刻于揚州」（原刻僅かに50巻、今増補して60巻と成し、道光27年揚州にて刻す。）という増補に関する説明が追加され、それが100巻本原刊版の「原叙」では「原刻六十卷道光二十七載刻于揚州咸豐二年重補成一百卷刊于高郵州」（原刻60巻、道光27年揚州にて刻す。咸豐2年重補して100巻と成し、高郵州（揚州付近の地名）にて刊行す。）と書き改められているのであるが、修訂版に至ってその「原刻～」の追加説明が削除されているのである。これは、100巻本原刊版で加えられた「後叙」の最後に「咸豐二年邵陽魏源叙於高郵州」（咸豐2年、邵陽魏源高郵州にて叙す。）という刊記があり、記述が重複していることから不要と見て省かれたものと解釈することができる。

序文末の刊記の変遷に関わる少々複雑な状況を、上の説明では省いた事情も含めて図式化して示せば図6のようになる。引用中における句読点の有無はすべて原文の通りである。

「原刻～」の追加説明の内容と有無の状況から考えて、(3a)が(2b)と(3b)のあいだに位置する版であると判断するのが自然であろう。

ちなみに、(3a)、すなわち、100巻本原刊版の序文末の刊記は百瀬(1934, 1980)、伊藤・丸山(1976)、榎(1987)、榎一雄著作集編集委員会編(1992)に引用されている。したがって、「原刻～」のない100巻本を見た注意深い者がそのいずれかを読めば異版がある可能性に気付いたはずであるが、実際にはそれが気付かれることはなかった。²¹

²⁰ 「夷艘出江」は、道光22年7月（1842年8月）の南京条約調印後、同年9月に英国軍艦が長江を出たことを表し、すなわち、アヘン戦争の終結を意味する（蔣(1996)）。

²¹ 本文では複雑な事情を簡略化して述べたが、百瀬が見たのは100巻本原刊版ではなく、1880（光緒6）年の重刊版である。さらに正確に言えば、見返しに「光緒六年邵陽急当務齋新鐫」と書かれた重刊版は筆者の確認の範囲に2種類あり、京都大学吉田南総合図書館蔵本には「原刻～」の追加説明があるが大阪大学附属図書館蔵本にはそれがないので、百瀬が見たのは京都大学蔵本と同じ版（もしくは筆者未見の版）の本であることになる。

伊藤・丸山と榎が見た100巻本の版は不明である。伊藤・丸山は「訳文のテキストとしては『中国哲学史資料選輯・近代之部』（中華書局、一九五九年）所収のものをを用い」と述べているが、『中国哲学史資料選輯』における「原刻～」の文面は異なり——筆者の見たいずれの文面とも異なり、内容にも誤りがある——、伊藤・丸山は少なくともその箇所については異なる版を使ったと見られる。

(1a) 50巻本原刊版(1844(道光24)年)の「海国図志叙」:	道光二十有二載歲在壬寅嘉平月内閣中書邵陽魏源叙于揚州時夷艘出江甬逾三月也
	↓ 変更なし。
(1b) 50巻本修訂版1、修訂版2(1845～1846(道光25～26)年?)の「海国図志叙」:	道光二十有二載歲在壬寅嘉平月内閣中書邵陽魏源叙于揚州時夷艘出江甬逾三月也
	↓ 「原刻～」の説明が追加される。
(2a) 60巻本原刊版(1847(道光27)年)の「海国図志叙」:	道光二十有二載歲在壬寅嘉平月内閣中書邵陽魏源叙于揚州時夷艘出江甬逾三月也
	原刻僅五十卷今増補為六十卷道光二十七載刻于揚州
	↓ 句の区切りを示す点が増えられ、「時夷艘出江甬逾三月也」が削除される。
(2b) 60巻本修訂版(1849(道光29)年)の「海国図志叙」:	道光二十有二載。歲在壬寅嘉平月。内閣中書。邵陽魏源。叙于揚州。
	原刻僅五十卷。今増補為六十卷。道光二十七載。刻于揚州
	↓ 「海国図志叙」が「～原叙」に変更され、「原刻～」の追加説明が書き換えられる。
(3a) 100巻本原刊版(1852(咸豐2)年)の「海国図志原叙」:	道光二十有二載。歲在壬寅嘉平月。内閣中書。邵陽魏源。叙于揚州
	原刻六十卷道光二十七載刻于揚州咸豐二年重補成一百卷刊于高郵州
	↓ 「原刻～」の追加説明が削除される。
(3b) 100巻本修訂版(1853(咸豐3)年以後?)の「海国図志原叙」:	道光二十有二載。歲在壬寅嘉平月。内閣中書。邵陽魏源叙于揚州。

図6 序文末刊記の変遷

4.2.3 字句の差異

字句の差異については50巻本と同じく限定的な範囲の調査しか行っていないが、例えばわずかに約1葉半の「海国図志後叙」の範囲だけでも字句の異なるところが2か所ある。具体的には、原刊版の「夷商」が修訂版では「洋商」に変更され、原刊版の「富甲田海」が修訂版では「富甲四海」（世界中で最も富む）に訂正されている。この変更と訂正も魏源没後の重刊版に継承されている。「富甲四海」については、旧版の「四海」が新版で「田海」という誤字に変わり、重刊版で訂正されて「四海」に戻ったという可能性も考えられなくはないが、「洋商」については、旧版の「洋商」が新版で「夷商」に書き換えられ、重刊版で再び「洋商」に戻されたということは少々考えにくい。

100巻本修訂版で省かれた「原刻～」が後年の重刊版で復活し、しかし、重刊版によってはそれが無い——上記の大阪大学蔵本のほかに1867（同治6）年と1868（同治7）年の重刊版にもない——という事実は魏源没後に出版された個々の重刊版の底本が何であるのかという問題を提起するが、本来版を考察の対象としている本小論の課題の範囲を超える。もし「原刻～」のある重刊版は100巻本原刊版によっていえることができるのであれば話は簡単であるが、その他の文面には原刊版ではなく修訂版に一致する要素が認められ、状況は複雑である。原刊版と修訂版のあいだに中間的な版があったのかも知れず——もしそうだとすれば、これは再び原刊版の問題になる可能性がある——、また、それ以外の可能性も考え得るが、今は想像を述べる以上のことはできない。

また、卷四十五「大西洋 欧羅巴洲^(ドイツ) 耶馬尼下」に『外国史略』から10葉以上にわたって引用されたり(10a～22b)において、原刊版では英語の German の音訳が36か所で「日耳曼」と書かれ、しかし、2か所に限って「日爾曼」という表記が使われている。²² 他方、修訂版においては、計38か所のすべてで「日耳曼」と書かれている。この違いは、前者から後者への変更と見れば、表記の統一として自然な解釈が得られる。もし逆に後者から前者への変更あるいは変化と見ようとすれば、その動機、原因は何かという難問を生じる。

念のため付言すれば、「海国図志後叙」も『外国史略』からの引用も100巻本で初めて加えられたものであり、60巻本までの版との関係を考える余地はない。

4.3 100巻本2版の出版年

100巻本原刊版の出版年は、扉の見返しの刊記に書かれた「咸豊壬子年」を信用して、咸豊2年、1852年であったと考えるのが穏当であろう。咸豊2年は正確には西暦の1852年2月20日～1853年2月7日に相当するが、記述の簡潔のために1852年として扱う。

100巻本修訂版の見返しにも同じように書かれている。同一年に2つの版が出版されたということもあり得なくはないにせよ、1853年以後に見返しの表示を変えることなく修訂版が出版された可能性が相対的に高いと考えられる。もしそうだとすれば、本来版の100巻本の一部——すなわち、修訂版——の出版は従来考えられてきた1852年よりも遅いことになる。²³

上の推定は根拠のない単なる想像ではない。実際、魏源没後にその眷属によって出版された、巻頭の「重刊海国図志序」の末尾に「同治七年五月」——西暦1868年——と記された重刊版においても見返しにはやはりまったく同じく「咸豊壬子年古微堂重刊定本」と書かれているのである。²⁴ また、同様に、「重刻海国図志叙」の末尾に「光緒元年歲在乙亥長至日」と記され、見返しに「光緒二季平慶涇固道署重刊」と書かれている重刊版——光緒1年、2年は西暦1875年、1876年——が少なくとも3種類あるのであるが、その1つは約20年後の1895(光緒21)年ごろに出版された増補版である——扉の「海国図志壹百卷」に小字で「後

²² 「日耳曼」「日爾曼」を英語の German の音訳と推定できるのは、『外国史略』が英国人宣教師ロバート・モリソン(Robert Morrison、中国名馬礼遜)らによる著作であることによる。

²³ そして、もし100巻本修訂版の出版が1857(咸豊7)年の魏源死去以後であったとすれば、それは定義上『海国図志』本来版の範疇には入らないことになる。

陳(2021)によれば、天津条約(1858(咸豊8)年)において中国の公文書で英国に関する記述に「夷」の字を使うことが禁じられて以後、西洋諸国を「洋」によって表すことが増えた。もし100巻本原刊版の「海国図志後叙」における「夷商」が修訂版で「洋商」に変更されたのが同条約以後だったとすれば、その書き換えの動機に説明が与えられることになる。もっとも、「海国図志原叙」に19回も現れる「夷」は修訂版にすべてそのまま引き継がれているので、そのような解釈の妥当性は不明である。

²⁴ 「重刊海国図志序」に「同治七年五月」と書かれた重刊版の確認は大阪府立中之島図書館蔵本によった。注21で1868(同治7)年の重刊版と書いたのがこの版である。

附続集」と書き添えられ、100巻の後に続集が加えられている——。²⁵ それらの事例は、『海国図志』の見返しに書かれた年が必ずしも当の版の出版年を表していないことを明瞭に示している。

4.4 100巻本のさらなる別版？

最後に、本来版の100巻本の版に関する中国における2つの記述に触れておく。

李(1994)は、扉の見返しに「咸豊壬子年古微堂重刊定本」と書かれた100巻本——以上において見てきた通り、それは単一の版ではなく、本来版に限っても原刊版と修訂版の2版がある——のほかに、同年に刊行された「甘肅平慶涇固道署重刻本」があるとする。もしそれが事実であれば、本来版の100巻本は3種類あることになる。しかし、見返しに「平慶涇固道署」と記された諸本のうち最も早いものは筆者の確認の限りでは1876(光緒2)年の重刊版であり、また、他の研究でも一般に「平慶涇固道署」本は魏源没後の重刊版とされており、おそらく李の記述には混乱があるものと思われる。ただし、李は「平慶涇固道署」本の所在を具体的に述べており、確実なことを言うには現物の確認を要する。²⁶

また、陳其泰・劉蘭肖(2005)は、1852(咸豊2)年に刊行された100巻本に「広州重刻本」なるものがあるとする。ただし、陳・劉は「広州重刻本」の所在を示していない。筆者には、陳・劉の記述は1868(同治7)年の重刊版などとの混同ではないかと思われる。同版では、巻頭の「重刊海国図志序」の末尾に「同治七年五月^(ママ)日子壻陳善圻謹識於南海^{（ママ）}署」(同治7年5月、女婿陳善圻、南海県(広東省の旧行政区画名)署にて謹みて識す。)と書かれている。1852年刊の「広州重刻本」はそれに関する信頼し得る報告が現れるまでは差し当たり存在しないと考えるのが妥当であろう。

5 『海国図志』本来版の種類

筆者の確認することのできた『海国図志』本来版7種類の概要を一覧できる形に整理す

²⁵ 続集の扉には「海国図志続集」、その見返しには「光緒乙未冬月上海書局石印」と記されている。「光緒乙未冬月」は光緒21年11月であり、西暦の1895年12月16日～1896年1月14日に相当する。続集の冒頭には、光緒20年2月(1894年3～4月)に書かれた米国人宣教師ヤング・ジョン・アレン(Young John Allen、中国名林樂知)による序文がある。

先行研究でときに言及される『増広海国図志』は増補版の文字を小さくして出版し直したものである。筆者の確認した関西大学図書館増田渉文庫蔵本では、本来の100巻の前に「海国図志正集」と書かれた扉が加えられ、その見返しには「光緒乙未年上海書局石印」と書かれている。小字の使用により、総葉数が本来の増補版の3分の1程度に減っている。

²⁶ 李の挙げる2か所の図書館の蔵本はともに社会状況による閉館の時期に重なって調査することができなかった。

ば次頁に掲げる表6のようになる。魏源没後に出版された100巻本重刊版に関する情報も参考までに併せて示す。

本来版の7種類という数は確定的なものではない。今後さらに新たな版、新たな版区別が見出される可能性が十分にある。

従来あらゆる研究者が、『海国図志』の版の問題を考える際に見返しや序文の記載内容に頼りすぎてきたと言ってよいであろう。60巻本においては見返しに原刊版では「道光丁未仲夏古微堂鐫板」、修訂版では「道光巳酉夏古微堂重訂」と書かれていることから異版の存在が容易に知られる。それに対して、50巻本と本来版の100巻本には内容の異なる見返しが無いので、誰もが単一の版しか存在しないと思い込み、複数の版がある可能性が念頭にも浮かばなかったものと思われる。しかし今や、『海国図志』の見返しの刊記の信頼性が低いことは、表6に見る通り、同じ内容の見返しが100巻の相異なる版で繰り返し使われ——原刊版＝修訂版＝重刊版1、重刊版3＝重刊版4＝重刊版5、重刊版6＝重刊版7——、しかも、出版年が見返しに書かれた年よりもはるかに遅いものがある——重刊版1、重刊版5——ことから明らかである。この事実の確認から得られる教訓は、『海国図志』の版と出版年は、見返しと序文の内容だけでなくその字形、そして、本文の内容と字形などをも含む総合的な観察と分析に基づいて判断する必要があるということである。

それにしても、表6のように整理してみると、『海国図志』の版の種類が思いのほか多いことにあらためて驚かされる。役に立つはずもない内容を大量に含むこの巨著が20世紀に入るまで求められ続けたというのは不思議なことのようにも感じられるが、対外関係を見直す必要に迫られていた清朝末期の中国の人々の心をそれだけ引き付けるものだったのであろう。²⁷

6 おわりに

『海国図志』の本来版には、60巻本のみならず50巻本にも100巻本にも複数の版があることを明らかにし、それらが同書の改版過程上どのような相互関係にあるかを考察した。今後『海国図志』を精密な議論の資料として使う際には、単に50巻本、100巻本と言うだけでなく、その版の種類を示すことが必要である。

²⁷『海国図志』は中国では今も需要が多いと思しく、100巻本の影印本や翻字版が繰り返し出版されている。しかし、研究上の関心からすれば、50巻本と100巻本の各原刊版の内容を容易に確認する方法が無いのは残念なことである。60巻本の原刊版については1967年に台湾の成文出版社刊から影印本が出版されている。修訂版や重刊版の価値が劣るというわけではないが、『海国図志』の改訂の過程において重要な位置を占める50巻本と100巻本の各原刊版が影印本ないし画像公開の形で参照可能になることを期待したい。

表6 『海国図志』本来版一覧（附 100巻本重刊版）

	巻数	種別	序文		見返し		出版年 (推定)	確認した本
			標題	年	内容	年		
本来版	50巻本	原刊版	海国図志叙	道光22年 (1843年1月)	道光甲辰仲夏 古微堂聚珍板	道光24年 (1844年)	1844年	上海図書館蔵甲本(請求番号 緑普長3604)、上海図書館蔵乙本(請求番号 緑普長421301-20)
		修訂版1					1845年ごろ	愛知大学図書館蔵本、関西大学図書館蔵本(序文なし)、京都大学人文科学研究所蔵本、湖南図書館蔵本(40冊、扉なし)、湖南図書館蔵本(16冊、扉、序文なし)、島根県立図書館蔵本
		修訂版2			不明		1846年ごろ	和泉市久保惣記念美術館蔵本(扉なし)、華東師範大学図書館蔵本(扉なし)
本来版	60巻本	原刊版	海国図志叙	道光27年 (1847年)	道光丁未仲夏 古微堂鈔板	道光27年 (1847年)	1847年	秋市立萩図書館蔵本(序文なし)、成文出版社刊影印本(1967年)
		修訂版			道光己酉夏 古微堂重訂	道光29年 (1849年)	1849年	京都大学経済学研究科・経済学部図書館蔵本、京都大学文学研究科図書館蔵本、国立公文書館蔵本(第1冊なし)
		原刊版		咸豊2年 (1852年)	咸豊壬子年 古微堂重刊定本	咸豊2年 (1852年)	1852年	関西大学図書館蔵本、神戸大学附属図書館社会科学系図書館蔵本、中央大学図書館蔵本
重刊版	100巻本	修訂版	海国図志原叙 海国図志後叙				1853年以后	京都大学文学研究科図書館蔵本(地理、東洋史)、国際基督教大学図書館蔵本、国立国会図書館蔵本、東京大学東洋文化研究所図書室蔵本
		重刊版1	重刊海国図志序 (陳善圻)	同治7年 (1868年)			1868年	大阪府立中之島図書館蔵本
		重刊版2	海国図志原叙 海国図志後叙		同治丁卯 郴州陳氏重萊足本	同治6年 (1867年)	1867年	上海図書館蔵本
		重刊版3			光緒二季 平慶涇固道署重刊	光緒2年 (1876年)	1876年 またはそれ以後	早稲田大学図書館蔵本
		重刊版4	重刊海国図志叙 (左宗棠)	光緒1年 (1875年)				北京大学図書館蔵本
		重刊版5	海国図志原叙 海国図志後叙				1895年ごろ	京都大学文学研究科図書館蔵本(後附統集)、北京大学図書館蔵本(後附蔵集)
		重刊版6			光緒六年 邵陽急当務斎新鈔	光緒6年 (1880年)	1880年 またはそれ以後	京都大学吉田南総合図図書館蔵本(重刻海国図志叙なし)
		重刊版7						愛知大学図書館蔵本、大阪大学附属図書館蔵本、一橋大学附属図書館蔵本

凡例・注

- 1) 100巻本に関しては、序文の年の欄には最も新しい序文に記された年を記している。具体的には、本来版では「海国図志後叙」、魏源没後に出版された重刊版では「重刊海国図志序」「重刻海国図志叙」に記された年である。
- 2) 出版年は序文に記された年のみならず見返しに記された年にも必ずしも一致しない(本文4.3)。
- 3) 重刊版3～5は表に記した情報の限りではほぼ共通であるが、すべて相異なる版である。重刊版6～7についても同様である。
- 4) 重刊版5を小字による印刷に付した『増広海国図志』(注25)は省いた。

すでに断った通り、ここで述べたのは50巻本、100巻本ともに断片的な観察に基づく分析の結果である。中でも50巻本の原刊版2点の本文はごく一部しか調査できていない。50巻本は総葉数が1,500——ページで言えば3,000——に近いが、内容を確認することができたのはそのうちの十数葉に過ぎない。巨大で複雑な建物の内部を小窓から覗き見たも同然である。60巻本についてはほとんど調査を行っていない。また、巻数を問わず筆者の見えていない諸本が特に中国にはまだ相当数あるはずである。調査の範囲を以上の各要素に関して広げることによって『海国図志』の版の問題に関する理解が今後さらに深められることを期待したい。

稿を閉じるに際し、歴史的資料に関わる従来の研究において筆者の狭い把握の限りでは論じられることがなく、以上の議論においても深入りを避けてきた問題について述べておく。それは「出版年」という用語、概念の不明確性と不確実性である。書籍の出版とはそれを印刷、製本してそれを頒布、流通させることであろう。執筆に始まり、板刻ないし組み版、印刷、製本の各段階を経て書籍の流通の開始に至る出版の過程は複数の年にまたがることもあったはずである。しかし、過去の書籍については特に記録が残っていない限りその状況を正確に知ることができない。したがって、特に疑いを抱かせる要素がなければ扉や見返し、序文に記された年をかりに出版年と見なすということで満足せざるを得ない。本小論でも基本的にそのような認識に基づいて論じた。

50巻本の原刊版と修訂版1に同一の年月を記した見返しが使われ、100巻本では2組の事例において同一の年を記した見返しが10年以上後の再出版時にも使われていることが確かめられた。現代における出版の慣行を考えてみても、奥付に記された発行年月は必ずしも事実を正確に表しているわけではない。²⁸したがって、資料の出版年を問題とするときには、それがそもそも正確を期しがたい概念であることを理解し、しかし、そうであるにせよ出版年という表現によって何を表そうとしているかを自覚することが必要である。

なお、中国の早期の重要な世界地理著作の1つである謝清高口述、楊炳南筆録『海録』（1820（嘉慶25）年原刊）についても従来版の問題が歴史研究者によってはなほだ粗略に論じられてきた。『海国図志』にせよ『海録』にせよ門外漢が少し確かめてみるだけで気付く問題が長く見逃されてきたのは意外なことであるが、もっぱら資料に書かれた内容に興味があり、字句の差異や資料の版、出版年の問題には関心の薄い研究者が多いということなのかも知れない。『海録』については拙論（2022）で論じた。併せて参照願いたい。

²⁸ 加えて、日本では奥付に発行の年月だけでなく日まで記す慣習があるが、それが事実上意味を持たない場合も多いと思われる。

文献

- 鮎沢信太郎 (1953) 「世界地理の部」開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識—世界地理・西洋史に関する文献解題—』(乾元社)
- 伊藤昭雄・丸山末幸 (1976) 「魏源『海国図志』序文」西順蔵編『原典中国近代思想史 第1冊 アヘン戦争から太平天国まで』(岩波書店)
- 井辺一家 (1933) 「海防論者としての魏默深」『史淵』第8輯(九大史学会)
- 榎一雄 (1987) 「新疆の建省(五)—二十世紀の中央アジア—」『近代中国』第19巻(巖南堂書店)
- 榎一雄著作集編集委員会編 (1992) 『榎一雄著作集 第2巻 中国アジア史Ⅱ』(汲古書院)
- 大庭脩^{おさむ}編著 (1967) 「江戸時代における唐船持渡書の研究」(関西大学東西学術研究所)
- 小野勝年 (1937) 「海国図志」下中弥三郎編『東洋歴史大辞典』第1巻(平凡社)
- 小野川秀美^{おのがわ} (1960) 『清末政治思想研究』(京都大学文学部内東洋史研究会)
- 佐々木正哉 (1985) 「『海国図志』余談」『近代中国』第17巻(巖南堂書店)
- 佐々木正哉 (1986) 「批評と紹介 黄麗鏞編 魏源年譜」『近代中国』第18巻(巖南堂書店)
- 里井彦七郎 (1959) 「海国図志」下中邦彦編『アジア歴史事典』第2巻(平凡社)
- 下中弥三郎編 (1954) 『大人名事典 第7巻 外国篇Ⅰ』(平凡社) [「魏源」の項目(執筆者不明)。]
- 田野村忠温 (2015) 「意識地名『牛津』『劍橋』の発生と消長」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第55巻
- 田野村忠温 (2019) 「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性—『海国図志』と『小方壺斎輿地叢鈔』—」『或問』第36号
- 田野村忠温 (2021a) 「音訳語『珈琲』の歴史」『阪大日本語研究』33(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座)
- 田野村忠温 (2021b) 「音訳語における口偏の機能について—口偏蔑視表示説の検討—」『或問』第40号
- 田野村忠温 (2022) 「『海録』諸版とその系譜」『或問』第42号
- 陳力衛 (2021) 「『新関文件録』から見る19世紀後期の中国語の対訳—日本近代漢語との比較において—」『成城・経済研究』第234号
- 新島淳良 (1962) 「中国近代教育史年表(一)」『東洋文学研究』第10号(早稲田大学東洋文学会)
- 野村浩一 (1957) 「清末公羊学派の形成と康有為学の歴史的意義(一)—「持続の帝国」の没落—」『国家学会雑誌』第71巻第7号
- 羽田明 (1951) 「東西交通」東方学術協会編『中国史学入門』(平安文庫)
- 原田正己^{まさみ} (1969) 「中国近代における変法論の展開—中国近代思想の日本との関連を探る—」『季刊東亜』第6集(霞山会・東亜学院)
- 堀川哲男 (1966a) 『中国人物叢書 11 林則徐』(人物往来社)
- 堀川哲男 (1966b) 「魏源『海国図志叙』」西順蔵・島田虔次編『中国古典文学大系 第58巻 清末民国初政

治評論集』（平凡社）

増田渉 (1972) 「日中文化関係史の一面（Ⅴ）」『書評』（関西大学生協同組合組織部「書評」編集委員会）

増田渉 (1979) 『西学東漸と中国事情—「雑書」札記—』（岩波書店）

松原晩香 (1942) 『南蛮通交志』（大日本出版）

百瀬弘 (1934) 「清末の先覚者邵陽の魏源」『歴史公論』第3巻第6号（雄山閣）

百瀬弘 (1963) 『海国図志小考』岩井博士古稀記念事業会編『岩井博士古稀記念 典籍論集』（岩井博士古稀記念事業会）

百瀬弘 (1980) 『明清社会経済史研究』（研文出版）

山本正一 (1966) 「魏默深源年譜」『東洋文化研究所紀要』第7輯（無窮会）

白宛如編 (1998) 『廣州方言詞典』（江蘇教育出版社）

陈华 (1988) 「有关《海国图志》的若干问题」『求索』1988年第3期（湖南省社会科学院·湖南省哲学社会科学学会联合会）

陈其泰·刘兰肖 (2005) 『魏源评传』（南京大学出版社）

陳耀南 (1979) 『魏源研究』（乾惕書屋）

高虹 (1997) 『放眼世界—魏源与《海国图志》』（辽海出版社）

洪九来 (1994) 「有关《海国图志》的版本流变问题」『古籍整理研究学刊』1994年第3期（东北师范大学古籍整理研究所）

黄丽鏞 (1985) 『魏源年譜』（湖南人民出版社）

蒋英豪 (1996) 「魏源及其作品中的新世界」『文学遗产』1996年第4期（中国社会科学院文学研究所）

李龙如 (1994) 「《海国图志》版本考」『文史拾遗』1994年第2期（湖南省文史研究馆）

卢伯炜 (1994) 「论《海国图志》对中外文化交流的影响—纪念魏源诞辰二百周年」『苏州大学学报（哲学社会科学版）』1994年第3期

孫殿起 (1936) 『販書偶記』（借間居）

王晓秋 (1990) 「《海国图志》在日本的传播和影响」陆坚·王勇主编『中国典籍在日本的流传与影响』（杭州大学出版社）

王晓秋 (2003) 『近代中国与世界：互动与比较』（紫禁城出版社）

吴澤·黄丽鏞 (1963) 「魏源《海国图志》研究—魏源史学研究之二」『历史研究』1963年第4期（历史研究杂志社）

夏冰 (2014) 「《海国图志》一书的三个版本」『图书馆』2014年第2期（湖南图书馆·湖南省图书馆学会）

夏冰 (2016) 「《海国图志》的三个版本考论」『邵阳学院学报』第15卷第3期

夏剑钦 (2006) 『魏源传』（岳麓书社）

夏剑钦·熊焰 (2009) 『魏源研究著作述要』（湖南大学出版社）

张坤·田喻 (2021) 「《海国图志》出版之初的西人评介」『海交史研究』2021年第1期（中国海外交通史

研究会・福建省泉州海外交通史博物館)

鄒振環 (1999) 「清末地理學共同體的形成與近代中國地理學的學術轉型」 錢伯城・李國章主編『中華文史論叢』第 58 輯 (上海古籍出版社)

鄒振環 (2000) 『晚清西方地理學在中國——以 1815 至 1911 年西方地理學譯著的傳播與影響為中心』 (上海古籍出版社)

謝辭 『海國圖志』50 卷本の上海図書館蔵本、華東師範大学図書館蔵本、湖南図書館蔵本の調査に関しては大阪大学大学院文学研究科 (日本語学) の学生、修了生の^き沙広聡さん、崔蕭寒さん、^{もろげつ}馮玥さんの支援をそれぞれ得た。また、100 卷本重刊版の北京大学図書館蔵本の調査に関しては北京大学外国語学院孫建軍教授のお手を煩わせた。記して謝意を表したい。

A New Theory of the Revision History of *Haiguo Tuzhi*:
Identification of Versions Hitherto Undistinguished and Its Implications

Tadaharu TANOMURA

Although ample discussions and descriptions have been published by historians and linguists, both in China and in Japan, concerning editions and versions of Wei Yuan's *Haiguo Tuzhi* (Illustrated Treatise on the Maritime Kingdoms), there are basic facts that have evaded the notice of researchers with regard to the early phase of its publication.

It is part of the common wisdom that, as far as those editions and versions which were published while Wei Yuan was alive are concerned, there are three editions of *Haiguo Tuzhi*, viz. the fifty-volume edition published in 1844, the sixty-volume edition published in 1847 and the one-hundred-volume edition published in 1852, and that there is also an amended version of the sixty-volume edition published in 1849 whereas there is only a single version of the other two editions.

This article will demonstrate that there in fact exist, within the range of the versions published while Wei Yuan was alive, three versions of the fifty-volume edition and two versions of the one-hundred-volume edition, and explicate, with respect to each edition, how the three or two versions are located in the history of repeated revision of *Haiguo Tuzhi*, based upon analysis of factors including among others differences in description, shape of *hanzi* (Chinese characters), typographical errors and density of characters on a page.

Keywords: *Haiguo Tuzhi*, Wei Yuan, the fifty-volume edition, the one-hundred-volume edition